



3

指導ポイント



●情報の公開ってなんだろう？●

○本節の目的

インターネットの情報には、広く一般に公開されるものと、一部の限定された相手にしか公開されないものがある。その区別とともに、インターネット上の情報発信は大半が公開されることを前提にすべき点を、理解させる。

インターネット上の情報発信は、利用するサービスによって情報の公開範囲が異なる。ほとんどの情報発信サービス、すなわち掲示板やブログ、ホームページなどは、原則的に全世界に対して無条件に公開される。一方 SNS では、会員の中で、さらに友だちに限定された範囲にしか公開されないことが特徴である。

しかし、中には SNS のような体裁を取りながら、実際には会員以外でも情報を検索・閲覧できるサービスもある。情報の公開範囲は、サービスの見た目ではなく、利用規約などで確認する必要がある。

ネット上のサービスを利用する子供たちの多くは、全世界に対して発言しているという意識を持たない。しかし、自分の発言の影響範囲を理解させることで、情報発信の内容は自身でコントロールすべきということに気づかせることが重要である。

問題解説 3-1

次のうち、「公開される情報」に出して良いものはどれでしょう？

[模範解答]

- ・ 年齢
- ・ 性別
- ・ ハンドルネーム（ペンネーム）
- ・ 誕生日
- ・ 好きな食べ物
- ・ ペットの名前や種類
- ・ 学年

上記の情報は、単独、あるいは組み合わせにおいても個人を特定できる要素を持たないため、公開しても問題にならない。

実は、問題文で提示した情報はすべて、それぞれが単独で存在するなら、個人を特定する役には立たない。例えば本名がネットに出たところで、すぐに問題が発生するわけではない。

それでも一般的に本名などを公開することが危険視されている理由は、個人を直接指し示す固有情報と、それに関連する付帯情報を組み合わせることで、プライバシーに係わる別の非公開情報にまで到達できるからである。

例えば「プリクラ写真＋学校名＋よく行くコンビニの場所」という情報の組み合わせで、通学路

が判明したり、第三者が本人と直接接触できる可能性が増大する。住所や電話番号など、個人にすぐ到達できる情報の扱いにはもちろん十分な注意が必要だが、生活にまつわる一般的な情報が固有情報と結びつかないよう、公開する情報の組み合わせや、利用サービス間のリンクにも配慮する必要がある。

子どもたちは、同年代や近隣の友人を探す目的で、SNS などのサービス内で、年齢とともに住所、電話番号、現在地などを公開してしまう傾向がある。特に学年が低くなるほど、自分固有の趣味・嗜好といったアイデンティティが少ないため、代わりに学校名とクラスと出席番号というように、個人を特定しうる固有情報を書いてしまう。

一方で、福祉犯罪を目的とした大人が、子どものふりをして架空の固有情報を書き込み、連絡を請う事例も発生している。誰かがこれらの情報を書いていたとしても、それが事実である保証は何もないため、安易にそれらの情報を元に、電話やメールなど個人を特定しうる手段を使って、連絡をとるべきではない。

●他人のメールアドレスはだれのもの？●

○本節の目的

前節の「公開されない情報」に属する情報を入手した場合は、その情報の管理責任が発生することを理解させる。

情報が電子化されたことで、個人が特定できる情報が意図せず世の中に大量に流出する、いわゆる個人情報流出事件が増加している。こうした流出事故を防ぐため、2005 年より「個人情報の保護に関する法律」、いわゆる「個人情報保護法」が施行された。ただし、これは 5000 件を超える個人情報をデータベースとして所有し、事業に用いている事業者のみが対象となっており、完全に個人が情報を所有する場合や、5000 件に満たない場合は、この法の対象とならない。

しかしながら、個人が特定できる情報は、情報を持つ側が正しく管理すべきという法の精神や考え方は、個人にも当てはめることができる。自分の連絡先を誰かに伝えることで、その情報管理が他人任せになるという事実は、通常は大人でもあまり意識していない。また、漏洩を気にして連絡先をまったく教えないことも不可能であろう。

だからこそ、情報を受け取った側に管理責任があることを周知し、漏洩した場合のリスクをよく理解させることが重要である。具体的なリスクには、望まない相手からの連絡、広告（spam）メールの増加、チェーンメールなどいたずら目的の利用、なりすましによる偽情報の流布などが考えられる。

問題解説 3-2 設問 1

1. B くんから「メールアドレス教えてよ」と言われたときに、A くんはどうすれば良かったのだと思いますか？

[模範回答]

A くんは返事をいったん保留し、B くんにアドレスを教えていいかどうかを、C くんを確認する。

他人の情報を管理する責任は、その量にかかわらず、情報の保有者にある。尋ねられたからといって、むやみに他人の連絡先を教えるべきではない。

問題解説 3-2 設問 2

2. 友だちのメールアドレスを、本人以外に聞くことについて、どう思いますか？

[模範回答]

誰かを利用して他人のメールアドレスなどの個人情報を聞きだす行為は、行うべきではない。

パスワードなどのセキュリティ情報を引き出す方法としては、技術的な穴（セキュリティ・ホール）を突いて盗み出すだけではなく、人間関係の隙を突いて、相手に秘密をしゃべらせる方法がある。誰かの個人情報を、別の第三者から引き出すことは「ソーシャルハッキング」と呼ばれ、情報漏洩誘発手段として広く知られている。

例題のようなケースは、デリケートな友人関係を内包することで非常に複雑で、かつ正解のない状況になりがちである。子どもたちには、誰かの個人情報を本人の許可なく他人に教えるべきではないこととともに、他人の個人情報をむやみに聞き出すべきではないと理解させることが重要である。

利害関係がなく、良好な関係であることが確認できている場合には、無断で個人情報を伝えることもあるだろう。その場合でも必ず事後に、自分が先方に情報を伝えた旨を、その情報の該当者に伝えておくべきである。常に個人情報の伝達ルートを確認しておくことで、お互いの信頼関係が生まれ、より強固な人間関係を築くことができる。

問題解説 3-2 設問 3

3. どのような状況なら、ほかの人のメールアドレスを本人に無断で教えてもいいと思いますか？

[模範回答]

- ・ 家族に不幸があったなど、緊急に連絡を取る必要がある場合
- ・ 本人の身に危険が迫っているような場合
- ・ 本人の生存確認が必要な場合

などの緊急時には、関係する大人に判断を仰いで、第三者に個人情報を伝える。

指導ポイント

ここで言う「関係する大人」とは、先生や相手の保護者などである。関係する大人は、事実関係を正確に把握し、落ち着いて判断する必要があることは言うまでもない。

ただし、メールは相手に今すぐ確実に伝達されるわけではなく、相手もすぐに内容を確認しない場合があるので、緊急の連絡手段としてはあまり好ましくない。その場で確実に相手に連絡を行う最善の手段は、通話である。

●ネットの書き込みは消えない?●

本節の目的

ネットに掲載した情報は、知らない誰かも見ている、見ることができるということを理解させ、見られても問題ない情報を書くべきであることに気づかせる。さらに先の「情報の公開って何だろう?」の節を振り返り、複数箇所に散在する情報を整理すれば、個人の特定が可能だということを再認識させる。

問題解説 3-3 設問 1

1. プロフの写真を削除したのに、なぜこのようなことが起きてしまったのでしょうか?

[模範回答]

いったんネットに掲載した情報は、誰かの手によって保存されたり、転送されたりすることがあるから。

公開される情報として書き込んだ話、写真などは、コピーや転載を繰り返しながら伝達される。サイトから情報を消したとしても、コピーや転載はいつまでも残り続ける。サイトの情報を Web 上のサーバや PC に保存する“クリッピングサービス”も、数多く存在する。削除されるかもしれない情報をそのまま保存する「ウェブ魚拓」(<http://megalodon.jp/>)は、その代表的なサービスである。

したがって、トラブルが起こった場合、大元の情報を削除しても無駄であることが多い。特に、ネット上である程度騒ぎになってから削除しても、ほとんど意味がない。削除したからといって、「なかったこと」にはならないのが、ネットの特徴であることを理解させる必要がある。

問題解説 3-3 設問 2

2. A さんはどのようにすれば良かったのだと思いますか?

[模範回答]

情報を公開する際に、公開することでどのような問題が起こりうるかを想像すべきだった。

自分以外の人間の情報に関しても、自分の情報と同様に十分に注意を払う必要がある。相手に無許諾で、友だちの写真などを掲載すべきではない。

また、自分の発信情報と友人の発信情報を組み合わせることで、個人が特定される場合もある。

2人が友人関係であるということで、複数の情報が統合され、全体で1つの完全な個人情報を作成するからである。

問題解説 3-3 設問3

3. あなたはプロフィールを作るとき、何に気をつければよいと思いますか？

[模範回答]

- ・自分が特定される固有の情報（文化祭の名称、学校の略称、出席番号など）を書き込まない
- ・他人の情報を書き込まない
- ・プロフィールは誰でも見ることができることを意識する。
- ・具体的な情報は「どこまで書いてよい」というルールを自分で作っておく

ケータイにはカメラ機能が付いており、メールへの写真添付やネットへのアップロードが気軽にできることから、昨今では個人情報として写真の存在が大きくなっている。特に一部の子どもたちの間で、自身を露出した写真（男子生徒では喫煙や飲酒、女子生徒なら自分の下着姿や裸など）を、自らサイトにアップする問題が起きている。

これは、生徒が利用するサイトで「アクセス数に応じてポイントが貯まる」といったシステムがよく導入されていることが、1つの要因になっている。この本来の趣旨は活発な発言を促すことにあるが、文章による表現がままならなかったり、書くことがないといった生徒は、自身の露出によって安易にアクセス数の増加を狙うといった、誤った使い方に走る傾向がある。

もちろんこういった写真は“健全”ではなく、ケータイのフィルタリング規制を受けないEMA^{†1}認定サイトでは、運営者自身のパトロールによって即時削除される体制になっている。しかしながら、アップされてから削除されるまでに、どうしてもタイムラグが発生する。その間に、画像やサイトが保存・転載される可能性は常に存在する。

仮に、そういった画像やプロフィールでの発言などが保存・転載されてトラブルとなった場合、元になった情報を削除することに躍起となる保護者や学校関係者も多い。しかし、騒ぎが大きくなってから削除すると、隠蔽行為と受け取られ、火に油を注ぐケースもある。保護者や本人の感情慰撫という側面から、削除も1つの方法であることは否定できないが、前述したようにネットでは削除しても「なかったこと」にはならない。どのタイミングならば削除に鎮静効果があるかなど、当該サービス事業者と相談し、その経験による判断を仰ぐことが妥当であろう。

また、ネット上の非難に対していちいち反論したり、攻撃したり、開き直ったり、黙って元の情報を削除することは、かえって騒ぎを大きくし、本来は関係のない興味本位の人間を多数引き寄せ、いわゆる「炎上」を引き起こす結果となる。一般的に、ネットで騒ぎになったときの沈静化策として効果が高いのは、本人による謝罪と訂正である。間違った情報が問題となっていた場合には、正しい情報を改めて発信し直したり、発言を取り消す必要がある。

^{†1} 一般社団法人モバイルコンテンツ審査・運用監視機構 <http://www.ema.or.jp/ema.html>

●何を書き、どう伝えるか●

本節の目的

ネットでの情報発信は、自分で淡々と発言するスタイル（モノログ）と、他人との会話の中で発信するスタイル（コミュニケーション）の2つがある。前節ではモノログを主題としているが、この節ではコミュニケーション中の情報発信にありがちな感情の発露の問題を、子どもたちに考えさせる。

ネット上のコミュニケーションサービス（プロフのゲストブックやホームペの掲示板など）で、1対1のやりとりを長く続けていると、他の誰にも見られていないような錯覚に陥り、対面した会話では言わないようなことが、つい噴出するケースが散見される。自分が利用しているサービスが、どれぐらいの人たちに公開されるものなのかを理解していないことで、さらに問題が大きくなることもある。

思ったことをそのまま口にするすると相手を傷つけることがある、といったことは対面の会話では経験的に学んでいるが、ネットという媒体を通したときには、忘れてしまいがちである。もしくは、自分には仲間がたくさんいて、彼らが自分の意見に味方してくれると錯覚してしまう傾向も見られる。ネットを介したからといって、自分の発言を制御することは忘れてよいわけではないことを、理解させる必要がある。

現在の社会には、ネット上での発言と、実際に対面したときの物腰がまったく異なり、まるで別の人格であるかのような人もかなり存在する。実社会での「人格」に対して、ネット社会でのそれを「ネット人格」と呼ぶこともある。かつて、ネットが実社会に影響を及ぼすことのない、小さな存在であったころは、こういった「人格」の分離はあまり問題とされなかった。しかし、ネットが実社会に対する影響力を持つに従って、実社会とネット上での言動を一致させることが求められていくと推察される。

もちろん、「限定された範囲」で自由に意志を疎通させることは、保証されるべきである。ただし、現在のケータイサービスでは公開範囲が異なるものが混在しており、画面からは区別できないことも多い。「限定された範囲」のつもりで発言したことが、全体公開として発信されるといった、勘違いによる事故を防止することもまた重要である。

本節末には、ケータイにおける現在の代表的なサービスと、そのサービス中で全体公開される機能と、限定された範囲でしか公開されない機能を分類した。子どもたちの利用状況にあわせて、指導の参考にしていただければ幸いである。